

開館20周年記念企画展

生誕100年 森英恵 ヴァイタル・タイプ

2025年9月20日（土）-12月1日（月）

【休館日】火曜日（9月23日は開館）、9月24日

【会場】島根県立石見美術館 展示室C・D

【主催】島根県立石見美術館、しまね文化振興財団、日本海テレビ、山陰中央新報社、中国新聞社、森英恵展の実施による地域の魅力発信とインバウンド誘客実行委員会

【特別協力】森英恵事務所

【協力】一般財団法人森英恵ファッショングループ、インファス・ドットコム、MN インターファッション株式会社、日活株式会社、水戸芸術館

【後援】芸術文化とふれあう協議会、NHK 松江放送局、毎日新聞松江支局（予定）

【展覧会概要】

島根県出身の世界的ファッショングループ、森英恵の生誕100年を記念し、没後初となる大規模な展覧会を開催します。1950年代にキャリアをスタートさせた森は、デザイナーとして活躍する一方で、母であり妻もありました。戦後の高度経済成長期の日本において、映画衣装の制作を通して頭角を現し、家庭を持ちながら社会的にも大きな仕事を成し遂げるその姿は、新しい女性の先駆けとして注目されました。1961年、森が新たに提唱したのが「ヴァイタル・タイプ」という人物像です。



ニューヨークのショー会場で、1970年代半ば 写真提供：森英恵事務所

快活で努力を惜しまないその姿は、そのまま森の生き方と重なるものでした。1965年にはニューヨークへ、1977年にはパリへと活動の場を広げた森は、生涯を通じて創作に情熱を注ぎ続けました。さらに、日本人として初めて海外で本格的に自身のブランドを確立しただけでなく、ファッション雑誌やファッションショーの記録といった情報メディアの運営を通じて、日本のファッション界の底上げを図りました。加えて、日本の布地や職人の技をいかした作品を通じて、世界に向けて日本の高い技術力と美意識を発信した点にも、改めて注目されています。本展では、森英恵の生き方とものづくりの哲学を、オートクチュールのドレスや写真、資料など約400点を通して紐解きます。

森英恵《イヴニングアンサンブル》1977年秋冬
HANAE MORI HAUTE COUTURE 撮影：小川真輝

見どころ1 アジア人初のパリ・オートクチュール正会員、森英恵のドレスが一堂に

1977年から17年間にわたり森英恵がライフワークとして取り組んだオートクチュールから、選りすぐりのドレスを展示。高品質な素材と卓越した技術が生み出す一点ものから、森の美意識と創造力を体感できます。

見どころ2 日本産にこだわったオリジナルの布地 初出品

アメリカへと活動の場を広げた森英恵は、着物文化の伝統によって成熟していた日本産の帯地や絹織物で作品を作りました。高品質な絹地に鮮やかなプリントを施したオリジナルの布地は日本の美の表現として注目を集めます。本展では衣装の布地に改めて注目し、その良さがどういかされたかに注目して作品を紹介します。また、新たに発見された布の原画や試し刷りも展示します。

見どころ3 海外の美術館からの里帰り展示も 初出品

ニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されている森英恵のドレスを特別展示。アメリカを舞台に世界から注目を集めた森の足跡を伝えます。

見どころ4 ファッションを伝える情報基盤の構築

森英恵は、出版や映像制作に加え、ハナエ・モリビルをはじめとする発信の場を自ら創出することで、ファッションの魅力を広く伝える情報基盤を築きました。その先駆的な取り組みを紹介します。

【展示構成】

日本の森英恵 ヴァイタル・タイプ 1947年～

1



「ひよしや」開店の頃、1950年代半ば
撮影：石井幸之助 写真提供：森英恵事務所

「ヴァイタル・タイプ」とは、森が1961年1月号の雑誌『装苑』で打ち出した人物像。いきいきとしてさっぱりと清々しく、仕事に暮らしに、自分らしく取り組む女性で、それはまさに森英恵自身の姿とも重なるものでした。ここでは当時の取材記事を引用し、森自身が「アーティストであり、働く女性であり、妻であり母である」という新しい女性イメージを牽引する存在だったこと、そうした姿を通して創出していた様子を辿ります。また、この時代の重要な仕事として映画衣装の仕事を、さらに生涯にわたって親友であり戦友でもあったモデル松本弘子との交流についても紹介します。



森英恵《赤い花柄の男性用アロハシャツ（映画『狂った果実』衣装）》1956年、島根県立石見美術館 撮影：小川真輝



《ディナードレス（映画『夜霧よ今夜も有難う』衣装）》1967年、島根県立石見美術館 撮影：小川真輝



映画『夜霧よ今夜も有難う』1967年
写真提供：日活株式会社

アメリカの森英恵 1961～1976年

2-1 日本の素材と技巧 世界へ向かう森英恵 1961～1964年

2



新発見・初出品 四季ファブリックハウス《テキスタイル「十二単」原画》、1960年代後半、ハナエ・モリ、島根県立石見美術館 撮影：小川真輝
(石見美術館所蔵のドレスと柄が一致)



《ディナードレス》1960年代後半、ハナエ・モリ、島根県立石見美術館 撮影：小川真輝

初めて訪れたパリ、ニューヨークに刺激を受け、世界への進出を考えるようになった森英恵は、日本のよさ・日本らしさを改めて知ろうと、日本美術・文学・そして日本の布地について自ら学び直しました。着物文化を背景とする絹織物の伝統の中から職人たちの手を借りてオリジナルの服地を作り、建築や籠網の中から装飾であり構造体ともなる「網代編み」という意匠を見つけるなど、このときの研究成果は後の作品作りの礎となっています。ここでは森英恵が1961年から64年にかけて日本各地で調べ、オリジナルで制作するなどした日本の絹織物について、特集展示します。



モデルの松本弘子さん（右）と森英恵（左）、パリで
1961年 写真提供：森英恵事務所

2-2 アメリカでの躍進 1965～1976年

1965年1月9日、森はニューヨークのホテル・デルモニコ(Delmonico's)にてニューヨークで初となるコレクションを発表。「MIYABIYAKA(雅やか)」と題されたそのコレクションは「East Meets West(東と西の出会い)」と評され、東洋と西洋の文化的融合が讃えられました。同地のデパートでの取り扱いが始まると、その良さにいち早く注目したのがアメリカン『VOGUE』編集長、ダイアナ・ヴリーランドでした。美しい日本の布を生かした優美な表現が、雑誌『VOGUE』を通して世界中に伝えられ、森の活躍を決定づけていきます。また、東洋美術の収集で知られるメアリー・バークをはじめ、森の作品を愛した文化人たちにも支えられ、アメリカでの活動は揺るぎないものとなっていました。デパート文化を背景に戦後巨大マーケットとなつたアメリカのファッション業界。そして、プレタポルテ(高級既成服)が台頭する世界的な情勢の中、実力を伸ばし、事業を育てていった森の姿を見つめます。海外の美術館に森英恵自身が寄贈した作品の、初めてとなる里帰り展示も予定しています。



ダラスのデパート「ニーマン・マーカス」オーナー、スタンレー・マークスと森英恵、1974年 写真提供：森英恵事務所



初出品・里帰り展示
森英恵《イヴニングアンサンブル》1965-67年、ハナエ・モリ、メトロボリタン美術館、ニューヨーク、1984年 ダイアナ・ヴリーランド寄贈 (1984.607.6a-c)
© The Metropolitan Museum of Art. Image source: Art Resource, NY

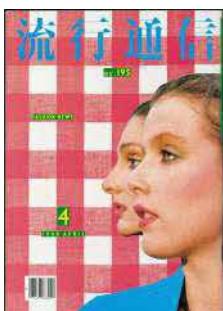
ファッションの情報基盤をつくる—出版・映像・表現の場づくり 1966年～

3

1966年、森英恵の店では最新のファッションの話題と、森の新作を紹介する媒体として『森英恵流行通信』を刊行。同誌は当初顧客向けの配布物だったものの、鋭い切り口と充実した特集記事が話題となり、一般販売の雑誌『流行通信』となって継続されました。気鋭のデザイナーやアーティスト、写真家を起用した誌面作りを特徴とする日本屈指のファッション誌となった同誌は、森が生涯にわたり注力した、ファッションを文化へ押し上げる活動の端緒と言えます。森の店の経営は当初から夫である森賢が支えてきましたが、森の仕事をどう見せ、世界的なファッションの動向の中にいかに位置付けていくか、そして日本全体でファッションを文化へと押し上げるにはどうしたら良いか、という意識を英恵と賢は共有していました。森の活躍の場が日本からアメリカ、フランスへと拡大する中で、ハナエ・モリグループは事業を拡大。アメリカのファッション業界紙『WWD』を日本へ導入し(WWDJAPAN)、78年には表参道のランドマークとなつたハナエ・モリビルを完成させます。ビルは森のショーを開催するほか、若いアーティストの作品発表の場、あるいはファッションに敏感な人々の交流の場ともなりました。



『森英恵流行通信』創刊号
1966年 島根県立石見美術館



アートディレクション: 横尾忠則
『流行通信』No.195 1980年4月号
島根県立石見美術館

感覚的な表現をもとにした83年には映像事業部を立ち上げ、85年から現在まで続くテレビ番組「ファッション通信」を始めます。83年にはさらに、一般財団法人ファッション振興財団を設立し、服飾文化を紹介する展覧会やデザインコンテストを開催しました。こうした事業は長男の森顯が引き継ぎ、今日へと継承されています。

ここでは自社の成長とともに、出版や映像などファッションの情報基盤を整えていったハナエ・モリグループの事業について紹介します。ファッションの動向を記録し、それを伝える中で雑誌やテレビ番組、あるいはビルが、次なる表現を生み出す場ともなっていました。こうした状況を、写真や雑誌、映像をもとに紐解きます。

フランスの森英恵 1977～2004年 オートクチュール

4



ハナエ・モリオートクチュール 2004秋冬コレクション（ファイナル・コレクション）
のフィナーレ ウェディングドレスを着た孫娘の森泉と、2004年
写真提供：森英恵事務所

1977年、森はパリ・オートクチュール組合の正会員となり作品発表を始めます。日本に続きアメリカでの活躍も認められ、作品のオリジナリティやアーティストとしての社会的信用を評価された、東洋人として初めてとなる快挙でした。森はそれまでの独自の色や柄をいかす作品に加え、パリではオートクチュールならではの素材や技巧をつくした作品作りに挑戦してゆき、創作の幅を広げていきました。ここでは「刺す」「織る」「たたむ・重ねる」「墨絵」「花」「白と黒」「お嫁さん」など、技法や素材に注目した小テーマを立て、1977年のデビューコレクションから、2004年のファイナルコレクションまでを網羅的に紹介します。

左から
森英恵《カクテルドレス》1982年春夏 / 森英恵《イヴニングドレス》2002年春夏
いずれも HANAE MORI HAUTE COUTURE 撮影：小川真輝



森英恵とアーティストたち

5

森英恵のクリエイションはたくさんのアーティストたちとの協業の中で生まれました。ここでは森を支え、その仕事を豊かにしたアーティストたちの作品と、森と彼らとの交流を紹介します。

- ・松本弘子
- ・奈良原一高
- ・田中一光
- ・黒柳徹子
- ・岡田茉莉子
- ・美空ひばり
- ・横尾忠則
- ・浅利慶太
- 予定



奈良原一高（衣装：森英恵、モデル：松本弘子）
『墨染めのイヴニングドレス』1967年
写真提供：森英恵事務所
©Naruhara Ikko Archives



奈良原一高《森英恵 ファッション・デザイナー
「ハナエ・モリ」ビルのショーウィンドー <肖像
の風景>より》1982年、島根県立美術館
©Naruhara Ikko Archives

エピローグ

6

森英恵を知る人のインタビュー映像で最後をしめくくります。

【関連プログラム】（予定）

スペシャルトーク

モデルとして活躍する一方、近年は自身のブランド「tefutefu」で創作活動にも注力している森星さん。森英恵さんの孫娘である星さんに、英恵さんのクリエイターとしての顔や、家族としての素顔について語っていただきます。

【日 時】10月4日（土）14:00～15:30

【ゲスト】森星（モデル、「tefutefu」クリエイティブディレクター）

【聞き手】当館担当学芸員

【会 場】グラントワ大ホール

*詳細は展覧会ホームページ等でお知らせします。

スペシャルワークショップ オートクチュールの縫いに挑戦

森英恵さんの作品づくりを支えてきたアトリエは、1950年代から素晴らしい手仕事の技を大切に受け継ぎました。今回のワークショップでは、縫製の技を間近で見学し、その後実際に挑戦してみます。アトリエでの服作りや、仕事で使う道具についてもお話しいただきます。

【日 時】11月15日（土）14:00～16:00

【講 師】藤平昌代

【会 場】グラントワ講義室

開館20周年感謝祭 きんさいデー



毎年恒例、開館記念日に開催する全館あわせてのお祭り、きんさいデー。展覧会を見た後は、地元のおいしいお料理や面白いワークショップもお楽しみください！

【日 時】10月12日（日）10:00～14:30

【会 場】グラントワ全館

一部有料／雨天決行

ワークショップ

日本の布でしおりを作ろう

森さんが大切にした日本の布でしおりを作ります。

【日 時】10月12日（日）10:00～15:00

【会 場】美術館ロビー

申込不要／参加無料／英語対応

森英恵展にあわせ、訪日外国人向けに、地域の自然や文化を一体的に体験できる旅の企画を準備しています。「ミュージアム・ツーリズム」と名づけ、島根県立石見美術館が展覧会をつくる視点で提案する、アートと地域文化を繋げる旅プランです。

森英恵の仕事と生き方に触れた後、アーティストの故郷を食をテーマに探訪。五感で自然を感じる。

PLAN 1

石見のおうち茶文化体験

森英恵の色彩感覚を育んだ故郷の自然。森のデザインの原点を、地域に残る茶文化体験を通して、手で、目で、舌で、楽しみましょう！

- 森英恵の作品と地元地域とのつながりについて、学芸員が解説。
- 茶摘みを通して山や川の色や光、湿度など、森が体感した自然の魅力を追体験。日本では珍しくなった釜炒り茶づくり、釜炒り茶と緑茶の飲み比べ、釜炒り茶の特徴や文化について日本茶のプロからの解説も。



森英恵の故郷 石見の自然

POINT

森英恵の出身地では、山や裏庭の茶葉を摘んで自家製のお茶にする文化が残っています！



無農薬茶園で茶摘み

釜炒り茶づくり

釜炒り茶と緑茶の飲み比べ。
茶漬や地元食材のお弁当も。

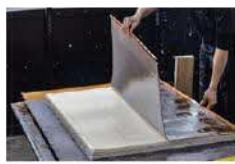
石州和紙を紹介する展示+工房探訪+夜神楽で、石州和紙の昔と今を訪ねる。

PLAN 2

石州和紙と石見神楽を知る

石見の伝統的工芸品、石州和紙の魅力と歴史に迫るプラン。地域の自然が育んだ文化を昼も夜も楽しもう！

- 石州和紙の歴史と、この地域特有の紙布を着る「いわみのくらし」を学芸員が解説。
- 石州和紙工房で楮煙や職人の手仕事を見学し、和紙会館で紙すきを体験。
- 紙を面などに使用する日本遺産の「石見神楽」を鑑賞。



ユネスコ無形文化遺産「石州和紙」

POINT

石州和紙は地元で栽培された良質な楮を使用して漉かれ、日本の文化財の修復にも使われています！



石州和紙の原料の楮



紙すき体験



日本遺産「石見神楽」

*現在準備中。発売日や料金など詳細は追ってお知らせいたします。

【観覧料】

当日券：一般 1,300（1,050）円／大学生 600（450）円／高校生以下 観覧無料 *（ ）内は20名以上の団体料金
前売券：一般 1,100円／大学生 500円 *7月2日（水）10:00 発売開始予定

【問合せ先】島根県立石見美術館

〒698-0022 島根県益田市有明町5-15 島根県芸術文化センター「グラントワ」内 島根県立石見美術館

TEL: 0856-31-1860 FAX: 0856-31-1884 E-mail: grandtoit@cul-shimane.jp https://www.grandtoit.jp

担当: 廣田（ひろた／学芸）、南目（なんもく／学芸）、志田尾（しだお／広報）



展覧会特設サイト

*本展は東京へ巡回する予定です。